

Rinta



執事

1 「私がかれを見たのは.....」

私がかれを見たのは、大戦が終わって二年ほど後のことだった。

私の営む街道沿いの宿屋に、かれが食事をとりに立ち寄ったのだ。

かれは私に気づかなかった。

うつくしかった目は閉じられたまま、瞼には傷痕がある。

かれの向かいに座った友人らしき男が、さりげない仕草でかれの手をフォークに導いた。

飲み食いする間、かれらは二言か三言しか言葉を交わさなかった。

まだ若い男が二人、ひっそりとしているのはかえって目立ったが、他の客はかれらの足元に置かれた軍用のトランクに気づくと、戦地帰りの兵士に対する気遣いとでもいわんばかりに目を反らした。

時間をかけて食事を終えると二人は何事か囁き交わし、やがてかれの友人が皿を運んでいた女中に声をかけた。女中が私を指し、男が席を立つ。カウンターの後ろで仕入れの帳面を広げていた私は、今気づいたふりをしてやってきた男に目を向けた。

部屋は空いてないか、と尋ねられ、私はおもわず言葉につまった。

断られるとおもったのか、男はテーブルで静かに待っているかれのほうを指し、連れが疲れてる、早く休ませたい、と言った。

空いているのは一人用の部屋だけだと私は答えた。嘘ではない。既に日は落ちかけていて、三階の小さな一間しか残っていなかった。

予備の寝台も出払っているが、と言うと、それで構わない、と男が言った。黙って見返すと男は一瞬黙り込み、目を反らした。それからどこか言い訳めいた口調で、今から歩き回るよりはましだ、と言い、窓の外を指した。

いつのまにか、雨が降り出していた。

私は気づいてもいなかったのだ。

2 「上へ続く階段を……」

上へ続く階段を、かれは友人に付き添われてゆっくりと昇った。

部屋の案内は女中に任せてあるので、私が世話を焼くことは無い。私はカウンターの上に開かれた宿帳に目を落した。

書かれたばかりのインクの痕が、奇妙に鮮やかだ。

二人分の名前。

かれの名前は友人の名に少しかかっていたが、筆跡は優雅に整っている。

綴られた文字の上を、私は指先でそつとなぞり、かれの名前を口の中で呟いた。その名は、今となっては遙か昔のことにおもえる日々へと私を引き戻した。

六年、いや、もう七年にもなるだろうか。

その頃、私はある屋敷の執事だった。

屋敷のあるじは、いわゆる「新しい貴族」だった。

植民地との貿易で財を成した商人で教養もあったが、英国の田舎で大きな屋敷を構えて暮らすことには慣れていなかった。

あるじにとって、私は掘り出し物だったはずだ。私は少年時代に父母を亡くし、叔父が執事を勤めていた格式ある屋敷で上級の使用人として知っておかねばならぬことをひとつおりに叩き込まれていたからだ。

馴染んだ屋敷でいずれ叔父の後を継ぎたいというのが私の望みだったが、おまえは上背がないから無理だと叔父からはっきり言い渡された。その屋敷では代々、背が高く威厳ある容姿の執事が雇われていたのだ。

母に似た小柄な体格を恨めしくおもいながら、私は叔父の命に従った。すでに三十半ばを過ぎていた私を手元に置いておくより、執事として勤めあげることができる屋敷へ移るよう手配してくれたのが、叔父の私に対する愛情だということはわかっていたので、不服を言うわけにもいかなかった。

幸い、あるじの人柄は悪くはなかった。知らぬことは私に尋ねる慎重さもあったので、私はあるじ一家が称号にふさわしい体面を保つことができるように力を尽くすことができた。

雇い入れた使用人たちも、まずまず満足のゆく働きぶりだった。無論、小さな揉め事や諍いはあるが、使用人の世界のことを上から下まで知り尽くしていた私はそうしたことに鼻が利いたし、厳しく締めつけるだけでなく時にはいくらか手綱を緩めて加減することもできた。

屋敷のすべてが、自分の采配で整然と動く。執事にとっては、ごく理想的な日々だった。

3 「かれは、幼い子息の教師として……」

かれは、幼い子息の教師として屋敷にやってきた。

あの日のことを、私はよく覚えている。

扉を開くと、そこには近隣の村では目にしたことのないような、うつくしい若者が立っていた

。

白い額にやわらかくかかる、ブルネットの巻き毛。

若い鹿をおもわせる伸びやかな体つき。

目鼻立ちは彫刻のようにくっきりと整っていた。

髪と同じ色の大きな目が私を見つめ、かれは明るく張りのある声で名乗った。なんともいえぬあどけない、無心な微笑を浮かべて。

かれに対して、私は初めの日からあくまでも威厳ある執事として振舞った。慇懃な態度にかれは戸惑っていたが、じきに距離を置かねばならぬ相手なのだと理解したようだった。

かれは学校を出たばかりで、形のよい頭には世界の知識が詰まっていたかもしれないが、世間のことはよく知らず子ども同然だった。そして私は、かれの愛すべき無邪気さをそのまま受け入れることができるほど老いてはいなかった。

元はよい家柄の出であるかれは、末子ゆえに受け継ぐ爵位も地所も持たなかったが、輝くような若さに加えて出自にふさわしい品のある物腰が身についていた。

あるじは若者と顔を合わせてすぐに、そのような紳士を使用人として扱うのは間違っていると感じたらしく、主人一家と同様にかれを遇するよう私に命じた。それはまったく、浅はかな親切心だった。教師は雇われ人であって、決して主人の家族ではない。だがあるじは、その点については私に口を挟ませず、自身の考えを押し通した。

無論のことながら、教師の特別扱いは使用人の反感を招いた。

もともと人懐こい性分なのだろう。かれは形式ばった会話しか交わせぬ暮らしが苦痛であるらしく、ささいな用事をこしらえて使用人を部屋に呼んではうちとけた会話をしようと試みた。かれが欲しがっていたのはただ単に人間味のある言葉のやりとりだったが、忙しく立ち働いている時に上の階まで呼びつけられて余計な用をさせられるほうはたまったものではない。部屋の呼び鈴が鳴るごとに、使用人のかれに対する敵意は強まっていった。

日がたつにつれ、屋敷の中で難しい立場に置かれた若者が笑顔を失ってゆくのを、私は残酷な興味を持って眺めていた。

孤独に耐えかねたかれは時折り、私にさえも他愛の無いことを話しかけようとした。救いを求めるようなかれの目を私は平然と無視し、話しかける隙を与えなかった。哀しげに長い睫毛を伏せる彼を視界の端にとらえて、私は奇妙な満足感をおぼえていた。

世慣れぬ若者に、立場というものを教えてやっているのだ、と私は思っていた。本来あるべき

立場以上の厚遇を与えられているのに、他の使用人からの好意まで望むのは欲が深すぎる。思い上がった若者への、これは罰なのだ、と。

だが、思い上がっていたのはかれではなく、この私だった。

4 「どこの屋敷にも、癖のある使用人は.....」

どこの屋敷にも、癖のある使用人はいる。

あるじが屋敷に連れてきた下男のひとりが、そうした男だった。元は商船に乗っていたとかで、船乗りの例にもれず何でも器用にこなしたが、何を考えているのか得体の知れない目つきをしていた。饒舌なほうではなく、私が用を言いつけても押黙ったまま聞いていて簡単な返事をするだけだった。

それでも大柄で屈強な元船乗りというやつは女を魅きつけるものらしい。表向き、使用人どうしの関係は許されておらず、知ればクビになるのは女のほうだということをメイド達は充分に心得ているはずだったが、どの娘も男の気を引きたがっていた。

男のほうは田舎娘では食いたりしないのか、色めいた冗談を言って笑わせたり尻を撫でてからかう程度のことしかなかったようだが、使いに出すと酒の匂いをさせて帰ってくるのがしばしばあった。屋敷づとめで、一応はまともな身なりをさせているのに、どこか野生馬のような荒々しさがある男だった。

この男だけは、若い教師に呼びつけられてもさほど渋る様子を見せなかった。皆の嫌がる仕事を引き受ける代わりに、村の酒場に立ち寄るようなちよつとした悪事について口をつぐんでもらえるという役得もあったのだろう。いつのまにやら、教師の呼び鈴には男が応えるのが当然のようになっていた。

下級の使用人と話し込むなど紳士の振る舞いとは言えなかったが、若者はよほど寂しかったのか。下男のほうも、かれの無邪気さにほだされたのかもしれない。

教師の部屋の前で、私は幾度か明るい笑い声を耳にした。親しげに下男の名を呼ぶ若者の声には甘えさえ潜んでいた。若者はまだ二十半ばにもなっておらず下男とは十かそこらは離れていたが、世慣れた兄を慕う弟のような具合だった。

私は、若者と下男とのあいだに奇妙な友情めいたものが育ってゆくのを黙って見ているしかなかった。かれらはどちらも人目のあるところでは親しげな素振りはしなかったので、私以外の誰も二人が仲のよい兄弟のような会話を交わしていることを知らなかった。

そして、私でさえ気づかぬうちに彼らの関係は変化していたのだった。

5 「珍しく、よく晴れた午後だった……」

珍しく、よく晴れた午後だった。

あるじ一家は他家を訪問中で、普段よりもひっそりとした屋敷の中で、私は急ぎの使いをさせるために下男を探していた。だが階下には見当たらず、誰も居場所を知らない。また酒場ででも飲んでいるのだろうかと思ひ、しかたなく居合わせた者に用を言いつけた。

そういえば、つい数日前にも同じようなことがあった。今日こそはきつく注意を与えねばと考えながら上階へ行った私は、若者の部屋の前で足を止めた。

短い、悲鳴のような声。

低い笑い声は、下男のものだった。

仕事を放り出してこんなところに、と腹を立てて私は扉に手をかけた。普段ならノックをしたはずだが、そのときの私は理由のわからぬ怒りに駆られていたのだ。

扉には、鍵がかかっていなかった。

部屋へ足を踏み入れた私は、ありえぬ光景に立ち尽くした。

最初に私に気づいたのは、若者だった。

日の射し込む明るい部屋の中で、かれの若々しい裸身は窓のそばの壁に押し付けられていた。両足を抱え上げられた姿勢で揺さぶられているからか、あるいは別の理由からか、かれの手は下男の首にしがみつくようにまわされていた。

やめろ。

若者は叫び、もがいたが、下男は止めようとしなかった。

男は荒々しく若者を突き上げながら振り返り、私を見て口元に嘲るような笑いを浮かべた。

狂気じみた振る舞いに、私は言葉を失った。

若者は泣きながら喘ぎ、私の目から逃れたいような素振りで男の肩に顔を伏せた。

やがて、事を終えた下男は若者から体を離し悠々と身づくろいをした。

ようやく気を取り直した私は、下男に部屋を出て行けと命じた。お前への話は後だと告げると、男は平然と私を見下ろして言った。

(どんな話だか知りませんがね。誘ったのはむこうだ。毎度生娘みたいに嫌がってみせてるが、本当は尻に突っ込まれるのが好きでたまらないんだ。なあ、先生？ 俺のように卑しい男に無理やりされるのが、あんた一番感じるんだろう？)

浴びせかけられた卑猥な言葉に、床に座りこんでいた若者は私をひたと見上げ、違う、と首を振った。

フン、と鼻先で笑って、下男は部屋を出て行った。

涙を流しながら私を見つめる若者のからだには、おぞましい情交の痕がまざまざと残っていた

私は、努めて冷静な顔をしようとした。

目の前には傷ついて震える若者がいたが、私の耳には下男の手紙がはつきりと残っていた。男に貫かれているときの若者の声や表情も……。

下男のけしからぬ振る舞いが嫌ならば、なぜ拒まなかったのか。力の差はあれど一人前の男だ。かよわい娘のように手籠めにされて抗えなかったなどということがあるはずはない。それも、紳士であるべき若者が、下男ごときに幾度も意のままにされるなど。

若者の姿を見ていられず踵を返した私に、彼はさすがのように声をかけた。

(誰にも、……誰にも、言わないでください)

(……私が？ 口にできると思うのですか。貴方が下男にさせていたことを？)

(違う)

否定をした若者を、私は黙って見つめることで非難した。

(……違うんです。でも信じてもらえないでしょう)

若者は、新たに溢れ出した涙を隠すようにうつむいた。

(僕にもわからない。どう言えばいいのか。どうして、こんなことになったのか……)

言い訳など、聞いていられる気分ではなかった。

私は若者に早く服を着るよう言い、廊下に出て扉をしっかりと閉めた。

屋敷の誰にも、部屋の中で起きたことを悟られたくなかった。一人でも知る者がいれば秘密にしておくことなどできない。醜聞というものは広まるものだ。

若者を庇ったわけではない。

私は、自分が保ってきた穏やかな日常を壊したくなかったのだ。

若者が職を辞したいと申し出たのは、二日後のことだった。

驚いて理由を問うたあるじに、若者は「軍に入る」と答えたそうだ。

かれのように、後継ぎでなく財産もない良家の子息が身分相応の暮らしをしようとおもえば、できる仕事は限られている。出世や冒険を夢見て将校になるのはよくある話ではあったが、一見おとなしげな若者にもそんな気持ちがあったのか、とあるじは少しく意外におもったようだ。

だが、子供相手に教師などしていても世に出ることはできない。若者のためにはむしろいいことだと喜んで、屋敷を離れることをあるじは許した。

自分の勝手に辞めるのだから、と若者は形式ばった別れを断り、あるじの言いつけで私一人が見送りに出た。

かれはまるで少年のように頼りなげな風情で、軍人になりたがる血気盛んな若者にはとても見えなかった。軍に入るというのは居心地の悪い屋敷を逃れる口実だと私は決めつけて、だが騒ぎにならずに厄介払いができることで安堵していた。

私の気持ちを、若者は察したらしかった。

車のほうに行きかけて、かれは突然私のほうに向き直った。

(あなたは、僕がいなくなるのを喜んでいるんですね。でも僕は……)

若者は言い淀み、言葉を続けることなく背を向けた。

車に乗り込むかれの耳は赤らんで感情の高ぶりを示していたが、車はすぐに遠ざかり門の向こうへと消えていった。

かれが言いたかったことがなんだったのか私には見当がつかず、ただ胸の辺りにナイフの刃先をあてられたような落ち着かなさを感じた。

7 「若者が屋敷を去ってから一年後……」

若者が屋敷を去ってから一年後、オーストリアの皇太子が暗殺された。

たったひとつの暗殺事件がきっかけで、かつてないほど大きな戦争が始まった。英国はドイツに宣戦布告した。ドイツがベルギーを侵略したからというのが宣戦理由だったが、あるじの話によれば、英国の植民地を横取りしようとする厚かましいドイツを許しておけないというのが本当のところらしかった。

ノブレス・オブリージュ。高貴な家柄の者には果たすべき務めがある。上流階級の子息たちは当然のように志願した。

屋敷のあるじも事業を共同経営者に任せ、従者を連れて戦地に赴いた。さほど若いとは言えない年だったが、もともと血気盛んな性分ではあり、各地の言葉や事情に通じていたので情報面での協力を請われたのだ。

下級の使用人たちも、若い者はあるじの薦めもあって揃って軍へ入隊した。

だが例の下男だけは、違った。

男は、教師との一件が表沙汰にならなかったのをよいことに恥ずかしげもなく勤めを続けていたのだが、あるじの出征する数日前に屋敷から姿をくらましたのだ。書斎の引き出しから現金がいくらかと、懐中時計につける純金の鎖が無くなっていたが、あるじ一家はそんなことにかまけている場合ではなく、盗難の届けも出されずじまいだった。

私自身は、兵士になりたいなどという考えを抱いたことはない。

重い荷物や武器を担いで行軍したり、地べたの上で寝起きしたりしていれば、撃たれる前に病気にかかって死んでしまうだろう。銃やナイフで誰かを傷つけたこともない。殴り合いの喧嘩さえ、幼い子供の頃に幾度かしたきりだ。戦場で役に立つようにはできていない男だということは、自分でよくわかっていた。

幸いにして、私はあるじから屋敷のことを託されていた。

跡継ぎである子息は遠い学校へ入れられ、屋敷に残るのは奥様一人。残った使用人は女と年寄りだけで、実際のところ私がいなくては屋敷がまわらぬ状態ではあった。

あるじ不在の間は使わぬ部屋を閉ざし、格式を崩さぬ程度に手間を省いても屋敷の大きさに比べると人手は足りず、質のよいものは金を払っても手に入りにくい有様だった。戦時の不便を呪いながらも、私はどうにかこうにか形をつけて屋敷を守っていた。

だが半年を過ぎた頃からあるじの便りは途絶えがちとなり、一年もたたぬうちに戦地で病没したとの知らせが届いた。伝染病に命を奪われたのだ。遺骸は戦地で焼かれ、身の周りの品が積まれた艦も戻ってくる途中で沈められて、何ひとつ戻ってはこなかった。

葬儀の後、魂が抜けたようになってしまった奥様には、残された屋敷が重荷になった。思い出のある屋敷から逃れたいという奥様の気持ちはわからぬでもなかったが、私としてはあるじの子

息を新しい主人として迎える日まで屋敷を守り続けたいところだった。だが維持しておくだけでも、費用は相当にかかる。

代々受け継いできた伝統というものがない分、手放すにもためらいは少なかったのだろう。実際の価値ほどの金額ではなかったが買い手もついて、奥様はお気に入りのメイドを連れて海に近い別荘で静養することとなった。書類のことは顧問弁護士が処理したが、買い主の代理人に屋敷の鍵を渡すまでの煩雑な作業は、すべて私が取り仕切った。

最後の日、手荷物を提げて門を出た私はおもわず振り返って屋敷を見上げた。老いて引退するまで勤めるつもりだった屋敷に、もう足を踏み入れることもないのだと考えると、なんとも言い難い妙な気分がした。

戦争が終わるまでの数年間、私はあちこちの屋敷で働いたり、従者として老いた紳士に仕えていたが、屋敷の上から下までを動かすことに慣れた私には息の詰まるような日々だった。望むような執事の口も見つからない。私の仕えるべき階級の人々は戦争に行き、多くが死んでしまった。

大戦が終わっても、状況は悪くなるばかりだった。爵位を持つもの、継ぐべき者が戦場で死ねば、当主を失った屋敷は閉ざされるしかない。屋敷での働き手だった若者の多くは主人と同様に戦場で死に、戻ってきた者は別のもっと割のよい仕事についた。戦争のあいだ、人手不足の工場や会社で働いていた女たちもだ。

私にとっての、「よき時代」は終わったのだ。

屋敷勤めに見切りをつけた私は、貯めていた金で売りに出していた宿屋を購った。

心地のよい寝室と美味しい食事が期待できる宿は近辺には無く、私には容易い仕事だった。屋敷勤めの頃を懐かしく思い出すこともあったが、日々の忙しさが失ったものを忘れさせてくれた。ただ、あの若者のことだけは頭のどこかに消えず残っていた。

かれは、本当に戦場に行ったのだ。

一緒にいる男がかれを気遣っているのは、共に戦った仲だからだろうか。質素な身なりや手回り品からすると懐具合はあまりよくないようにおもえる。目が見えないのでは仕事を得るのも難しいだろう。

私はふと、ここに若者を住ませたら、と思った。

かれひとり養うくらいの余裕はある。主人である私には、かれの世話をする時間をとるのもできないことではない。あの友人がしていたように彼に食事をさせ、階段を上がる時には付き添う。客用の寝室をひとつつぶしてかれの部屋にしてもいいし、私の部屋にもうひとつ寝台を入れてもいい。そう、身の回りの世話をするなら同じ部屋で寝起きするほうが便利だ。

若者との暮らしを頭の中に思い描き、私はどこか浮き立つような気分で立ち上がって部屋を出た。

だが、客室への階段を昇るうちに私は少し落ち着きを取り戻した。

若者は私に気づいていない。私のことなど憶えていないかもしれないのだ。それに私の印象は決してよいものではないだろう。このまま名乗らずにおいたほうがよいのかもしれない。

そう思ったときにはもう、三階にたどり着いていた。私は扉をノックする口実を何も持たないことに気づいて、自分に腹を立てた。無遠慮な安宿の親爺ではあるまいし、たいした理由もなしに客室に入り込むわけにはいかない。

だが用心のため夜に各階を見回るのは、私の役目だった。時間は早かったが、私は足音を忍ばせて廊下を歩いた。三階は一人部屋が二つあるきりで、片方には明日早くに発つという男が泊まっていた。もう寝んでいるのだろう。大きな鼾が聞こえてくる。

私がかれの部屋の前で立ち止まり、室内の気配をうかがった。

水音がする。

湯をつかっているのだろうか。

誘惑に負けて、私は身を屈め鍵穴に目を当てた。

やわらかい灯りの中、若者が床に置いた沐浴用の盥の中に入れていた。

こちらを向いた裸身は一人前の男らしい厚みを増していたが、水に濡れた皮膚はおもわず手を伸ばしたくなるような艶があった。ごつごつとした逞しさは無く、しなやかな輪郭のからだは見事な彫像のようだった。

若者が後ろを向いて何か言うと、同じく裸になったかれの友人が若者の後ろに立った。

目にうつった光景に、私は息をのんだ。

あたりまえのように若者の体に腕をまわした友人が、首筋に唇をつけたのだ。

若者はくすぐったげに首をすくめて笑った。かれらは向き合い、口づけを交わしながらお互いのからだを愛撫しはじめた。

あの屋敷で下男に壁に押し付けられていた時とは違い、かれは泣いてなどおらず、口元には優しげな笑みさえ浮かんでいた。おぞましきなど感じなかった。互いを愛おしむ二人の若者の姿はうつくしいとさえ思えた。じゃれあううちにかれらの表情は少し真剣になり、あわただしく互いのからだを拭くと私の視界から消えた。

寝台の軋む音。

抑えた息遣い。

何をしているかは明らかで、私は扉越しに漏れてきた密やかな喘ぎに打ちのめされた。

それは、かれの声だった。

恋人の名を呼ぶかれの声は甘く掠れ、寝台の軋みがいつそう激しくなる。

私はその場にいられず、よろけるように階段を下った。

その夜、浅い眠りの中で私は、若者の白いからだや声を幾度も夢見た。

翌朝遅くに、かれらは出立した。

知った目で見れば、二人の男たちは友人というには親密に過ぎた。

若者の目が見えぬことで寄り添うような距離は不自然に映らなかったが、簡単な食事をする間にも囁き交わし笑みを浮かべる彼らには、睦み合う者どうしの幸福で満ち足りたようすがうかがえた。

かつて、下男に抱かれたかれを私は汚らわしいものを見る目で見したが、あの時かれは私に「違う」と言った。

今おもえば、若者の人恋しさに下男がつけこんだのだろう。獲物に忍び寄る獣のように爪を隠し、兄のような顔をして警戒を解かせてから無防備な喉元に食らいつくことぐらい、あの男には簡単だったに違いない。誇り高い若者が、下男に犯されたなどと誰に言えただろう。紳士としての体面を守ろうと口を閉ざすかれを、あの男は思うさま弄んだのだ。

もうじゅうぶんに傷ついていたかれに、私は追い打ちをかけるような真似をした。

戦場で、かれは死ぬ気だったのかもしれない。

二人の若者に何があったのか、私には知る由もない。

だが、今のかれは幸福そうに見えた。

見送りには女中を行かせたが、ふと気づくとカウンターに包みが忘れられていた。列車で食べたいから、と頼まれた昼食の包みだった。

慌てて店の外へ出ると、かれらは通りの向こうを駅にむかって歩いていた。

私はすばやく通りを渡り、かれの友人に包みを手渡した。

ありがとう。

どういたしまして。

ただそれだけの、短い会話だった。

だが私の声を聞いた瞬間、若者ははっとした顔で閉ざされたままの目を私に向けた。

あの.....、と口を開いた若者の次の言葉を、私は黙って待った。

かれは何かを言いかけ、だが、私が何も言わぬのでためらったようだった。

列車に遅れる、と彼の友人が言い、かれは、そうだね、と答えた。

それから私の方に顔を向け、初めて会ったときのように無心な微笑を浮かべた。

おいしい食事だった、ありがとう。

そう言うと、かれは私に背を向けた。

私は通りに立ったまま、かれらを見送った。

なぜ名乗らなかったのか、理由は私にもわからない。

屋敷での仕打ちを詰られることが怖かったのか。

あるいは、「友人」の前で過去を持ち出して不快なおもいをさせたくなかったのか。
どれも当たっているようにおもえるが、違うような気もする。

かれは幻のようなものだ、と私は思った。

私のつまらぬ人生でひとつだけ光る、うつくしい幻なのだ。

END